

高瀬舟
森鷗外

高瀬舟は京都の高瀬川を上下する小舟である。徳川時代に京都の罪人が遠島を申し渡されると、本人の親類が牢屋敷へ呼び出されて、そこで暇乞いをするのを許された。それから罪人は高瀬舟に載せられて、大阪へ回されることであつた。それを護送するのは、京都町奉行の配下にいる同心で、この同心は罪人の親類の中で、おも立つた一人を大阪まで同船させることを許す慣例であつた。これは上へ通つた事ではないが、いわゆる大目に見るのであつた、黙許であつた。

当時遠島を申し渡された罪人は、もちろん重い科を犯したものと認められた人ではあるが、決して盗みをするために、人を殺し火を放つたというような、獐悪な人物が多数を占めていたわけではない。高瀬舟に乗る罪人の過半は、いわゆる、心得違いのために、思わぬ科を犯した人であつた。有りふれた例をあげてみれば、当時相対死と言つた情死をはかつて、相手の女を殺して、自分だけ生き残つた男というような類である。

そういう罪人を載せて、入相の鐘の鳴るころにこぎ出された高瀬舟は、黒ずんだ京都の町の家々を兩岸に見つつ、東へ走つて、加茂川を横ぎつて下るのであつた。この舟の中で、罪人とその親類の者とは夜どおし身の上を語り合う。いつもいつも悔やんでも返らぬ繰り言である。護送の役をする同心は、そばでそれを聞いて、罪人を出した親戚眷族の悲惨な境遇を細かに知ることができた。所詮町奉行の白州で、表向きの口供を聞いたり、役所の机の上で、口書を読んだりする役人の夢にもうかがうことのできぬ境遇である。

同心を勤める人にも、いろいろの性質があるから、この時ただうるさいと思つて、耳をおおいたく思う冷淡な同心があるかと思えば、またしみみと人の哀れを身に引き受けて、役がらゆえ気色には見せぬながら、無言のうちにひそかに胸を痛める同心もあつた。場合によつて非常に悲惨な境遇に陥つた罪人とその親類とを、特に心弱い、涙もろい同心が幸領してゆくことになる、その同心は不覚の涙を禁じ得ぬのであつた。

そこで高瀬舟の護送は、町奉行所の同心仲間て不快な職務としてきらわれていた。

いつのころであったか。たぶん江戸で白河楽翁侯が政柄を執っていた寛政のころでもあっただろう。智恩院の桜が入相の鐘に散る春の夕べに、これまで類のない、珍しい罪人が高瀬舟に載せられた。

それは名を喜助と言つて、三十歳ばかりになる、住所不定の男である。もとより牢屋敷に呼び出されるような親類はないので、舟にもただ一人で乗った。

護送を命ぜられて、いつしよに舟に乗り込んだ同心羽田庄兵衛は、ただ喜助が弟殺しの罪人だということだけを聞いていた。さて牢屋敷から棧橋まで連れて来る間、この瘦肉の、色の青白い喜助の様子を見るに、いかにも神妙に、いかにもおとなしく、自分をば公儀の役人として敬つて、何事につけても逆らわぬようにしている。しかもそれが、罪人の間に往々見受けるような、温順を装つて権勢に媚びる態度ではない。

庄兵衛は不思議に思つた。そして舟に乗つてからも、単に役目の表で見張つているばかりでなく、絶えず喜助の挙動に、細かい注意をしていた。

その日は暮れ方から風がやんで、空一面をおおつた薄い雲が、月の輪郭をかすませ、ようよう近寄つて来る夏の温かさが、兩岸の土からも、川床の土からも、もやになって立ちのぼるかと思われる夜であった。下京の町を離れて、加茂川を横ぎつたところからは、あたりがひっそりとして、ただ舳にさかれる水のささやきを聞くのみである。

夜舟で寝ることは、罪人にも許されているのに、喜助は横になろうともせず、雲の濃淡に従つて、光の増したり減じたりする月を仰いで、黙っている。その額は晴れやかで目にはかすかなかがやきがある。

庄兵衛はまともには見ていぬが、始終喜助の顔から目を離さずにいる。そして不思議だ、不思議だと、心の内で繰り返している。それは喜助の顔が縦から見ても、横から見ても、いかにも楽しそうで、もし役人に対する気がねがなかったなら、口笛を吹きはじめるとか、鼻歌を歌い出すとかしそくに思われたからである。

庄兵衛は心の内に思つた。これまでこの高瀬舟の宰領をしたことは幾たびだか知れない。しかし載せてゆく罪人は、いつもほとんど同じように、目も当てられぬ気の毒な様子をしていた。それにこの男はどうしたのだろう。遊山船にでも乗つたような顔をしている。罪は弟を殺したのだそうだが、よしやその弟が悪いやつで、それをどんなゆきがかりになつて殺したにせよ、人の情としていい心持ちはせぬはずである。この色の

青いやせ男が、その人の情というものが全く欠けているほどの、世にもまれな悪人であろうか。どうもそうは思われぬ。ひよつと気でも狂っているのではあるまいか。いやいや。それにしても何一つつじつまの合わぬことばや挙動がない。この男はどうしたのだらう。庄兵衛がためには喜助の態度が考えれば考えるほどわからなくなるのである。

しばらくして、庄兵衛はこらえ切れなくなつて呼びかけた。「喜助。お前何を思っているのか。」

「はい」と言つてあたりを見回した喜助は、何事をお役人に見とがめられたのではないかと気づかうらしく、居ずまいを直して庄兵衛の気色を伺つた。

庄兵衛は自分が突然問いを發した動機を明かして、役目を離れた対応を求める言いわけをしなくてはならぬように感じた。そこでこう言つた。「いや。別にわけがあつて聞いたのではない。実はな、おれはさつきからお前の島へゆく心持ちが聞いてみたかつたのだ。おれはこれまでこの舟でおおぜいの人を島へ送つた。それはずいぶんいろいろな身の上の人だつたが、どれもこれも島へゆくのを悲しがつて、見送りに来て、いっ

しよに舟に乗る親類のものと、夜どおし泣くにきまつていた。それにお前の様子を見れば、どうも島へゆくのを苦にしてはいないようだ。いたいお前は どう思っているのだい。」

喜助はにっこり笑つた。「御親切におっしゃつてくださつて、ありがとうございます。なるほど島へゆくということは、ほかの人には悲しい事でございます。その心持ちはわたくしにも思いやつてみる事ができます。しかしそれは世間でらくをしていた人だからでございます。京都は結構な土地でございますが、その結構な土地で、これまでわたくしのいたして参つたような苦しみは、どこへ参つてもなからうと存じます。お上のお慈悲で、命を助けて島へやつてくださいます。島はよしやつらい所でも、鬼のすむ所ではございません。わたくしはこれまで、どここと自分でいい所というものがございませんでした。こんどお上で島にいらるとおっしゃつてくださいます。そのいらるとおっしゃる所に落ち着いていゝことができますのが、まず何よりもありがたい事でございます。それにわたくしはこんなにかよわいからだではございますが、ついで病氣をいたしたことはございませんから、島へ行つてから、どんなつらい仕事をしたつて、からだを痛めるようなことはあるまいと

存じます。それからこん度島へおやりくださるにつきまして、二百文の鳥目をいただきました。それをここに持つております。「こう言いかけて、喜助は胸に手を当てた。遠島を仰せつけられるものには、鳥目二百銅をつかわすというのは、当時の掟であった。

喜助はことばをついだ。「お恥ずかしい事を申し上げなくてはなりません、わたくしは今日まで二百文というお足を、こうしてふところに入れて持つていたことばをいませぬ。どこかで仕事に取りつきたいと思つて、仕事を尋ねて歩きまして、それが見つかり次第、骨を惜しまずに働きました。そしてもらった銭は、いつも右から左へ人手に渡さなくてはなりません。それも現金で物が買つて食べられる時は、わたくしの工面のいい時で、たいていは借りたものを返して、またあとを借りたのでございます。それがお牢にはいつてからは、仕事をせずに食べさせていただけます。わたくしはそればかりでも、お上に対して済まない事をいたしているようになりませぬ。それにお牢を出る時に、この二百文をいただきましたのでございます。こうして相変わらぬお上の物を食べべていて見ますれば、この二百文はわたくしが使わずに持つていけることができます。お足を自分の物にして持つていけることは、わたくし

にとつては、これが始めでございます。島へ行つてみますまでは、どんな仕事ができるかわかりませんが、わたくしはこの二百文を島でする仕事の本手にしようと思つております。」こう言つて、喜助は口をつぐんだ。

庄兵衛は「うん、そうかい」とは言つたが、聞く事ごとにあまり意表に出たので、これもしばらく何も言うことができずに、考え込んで黙つていた。

庄兵衛はかれこれ初老に手の届く年になつていて、もう女房に子供を四人生ませている。それに老母が生きるので、家は七人暮らしである。平生人には吝嗇と言われるほどの、儉約な生活をしていて、衣類は自分が役目のために着るもののほか、寝巻しかこしらえぬくらいにしている。しかし不幸な事には、妻をいい身代の商人の家から迎えた。そこで女房は夫のもらう扶持米で暮らしを立ててゆこうとする善意はあるが、ゆたかな家にかわいがられて育つた癖があるので、夫が満足するほど手元を引き締めて暮らしてゆくことができない。ややもすれば月末になつて勘定が足りなくなる。すると女房が内証で里から金を持つて来て帳尻を合わせる。それは夫が借財というものを毛虫のようにきらうから

である。そういう事は所詮夫に知れずにはいない。庄兵衛は五節句だと言つては、里方から物をもらい、子供の七五三の祝いだと言つては、里方から子供に衣類をもらうのでさえ、心苦しく思っているのだから、暮らしの穴をうめてもらったのに気がついては、いい顔はしない。格別平和を破るような事のない羽田の家に、おりおり波風の起こるのは、これが原因である。

庄兵衛は今喜助の話聞いて、喜助の身の上をわが身の上引き比べてみた。喜助は仕事をして給料を取つても、右から左へ人手に渡してなくしてしまうと言つた。いかにも哀れな、気の毒な境界である。しかし一転してわが身の上を顧みれば、彼と我れとの間に、はたしてどれほどの差があるか。自分も上からもらう扶持米を、右から左へ人手に渡して暮らしているに過ぎぬではないか。彼と我れとの相違は、いわば十露盤の桁が違っているだけで、喜助のありがたがる二百文に相当する貯蓄だに、こっちはないのである。

さて桁を違えて考えてみれば、鳥目二百文をでも、喜助がそれを貯蓄と見て喜んでいのに無理はない。その心持ちはこっちから察してやることができる。しかしいかに桁を違えて考えてみても、不思議なのは喜

助の欲のないこと、足ることを知っていることである。

喜助は世間で仕事を見つめるのに苦しんだ。それを見つげさえすれば、骨を惜しまずに働いて、ようよう口を糊することのできるだけで満足した。そこで牢に入つてからは、今まで得がたかった食が、ほとんど天から授けられるように、働かずに得られるのに驚いて、生まれてから知らぬ満足を覚えたのである。

庄兵衛はいかに桁を違えて考えてみても、ここに彼と我れとの間に、大いなる懸隔のあることを知った。自分の扶持米で立ててゆく暮らしは、おりおり足らぬことがあるにしても、たいがい出納が合っている。手いっぱい生活である。しかるにそこに満足を覚えたことはほとんどない。常は幸いとも不幸とも感ぜずに過ごしている。しかし心の奥には、こうして暮らしていて、ふいとお役が御免になったらどうしよう、大病にでもなつたらどうしようという疑懼が潜んでいて、おりおり妻が里方から金を取り出して来て穴うめをしたことなどがわかると、この疑懼が意識の闕の上に頭をもたげて来るのである。

いったいこの懸隔はどうして生じて来るだろう。ただ上べだけを見て、それは喜助には身に係累がないのに、こっちにはあるからだと言つてし

まえばそれまでである。しかしそれはうそである。よしや自分が一人者であつたとしても、どうも喜助のような心持ちにはなられそうにない。この根底はもつと深いところにあるようだ、庄兵衛は思った。

庄兵衛はただ漠然と、人の一生というような事を思つてみた。人は身に病があると、この病がなかつたらと思う。その日その日の食がないと、食つてゆかれたらと思う。万一の時に備えるたくわえがないと、少しでもたくわえがあつたらと思う。たくわえがあつても、またそのたくわえがもつと多かつたらと思う。かくのごとくに先から先へと考えてみれば、人はどこまで行つて踏み止まることが出来るものやらわからない。それを今日の前で踏み止まつて見せてくれるのがこの喜助だと、庄兵衛は気がついた。

庄兵衛は今さらのように驚異の目をみはつて喜助を見た。この時庄兵衛は空を仰いでいる喜助の頭から毫光がさすように思った。

庄兵衛は喜助の顔をまもりつつまた、「喜助さん」と呼びかけた。今度は「さん」と言ったが、これは充分の意識をもつて称呼を改めたわけではない。その声わが口から出てわが耳に入るや否や、庄兵衛はこの

称呼の不穩当なのに気がついたが、今さらすでに出たことばを取り返すこともできなかつた。

「はい」と答えた喜助も、「さん」と呼ばれたのを不審に思うらしく、おそるおそる庄兵衛の気色をうかがつた。

庄兵衛は少し間の悪いのをこらえて言つた。「いろいろの事を聞くようだが、お前が今度島へやられるのは、人をあやめたからだという事だ。おれについてにそのわけを話して聞せてくれぬか。」

喜助はひどく恐れ入つた様子で、「かしこまりました」と言つて、小声で話し出した。「どうも飛んだ心得違いで、恐ろしい事をいたしました。なんとも申し上げようがありません。あとで思つてみますと、どうしてあんな事ができたかと、自分ながら不思議でなりません。全く夢中でいたしましたのでございます。わたくしは小さい時に二親が時疫でなくなりまして、弟と二人あとに残りました。初めはちようど軒下に生まれた犬の子にふびんを掛けるように町内の人たちがお恵みくださいますので、近所じゅうの走り使いなどをいたして、飢え凍えもせず、育ちました。次第に大きくなりまして職を捜しますにも、なるだけ二人が離れないようにいたして、いっしょにいて、助け合つて働きました。去年の

秋の事でございます。わたくしは弟といっしょに、西陣の織場にはいりまして、空引きということを行いました。そのうち弟が病気で働けなくなりましたのでございます。そのころわたくしどもは北山の掘立小屋同様の所に寝起きをいたして、紙屋川の橋を渡って織場へ通っておりましたが、わたくしが暮れてから、食べ物などを買って帰ると、弟は待ち受けていて、わたくしを一人でかせがせてはすみませんと申しております。ある日いつものように何心なく帰って見ますと、弟はふとんの上に突っ伏してしまっていて、周囲は血だらけなのでございます。わたくしはびっくりいたして、手に持っていた竹の皮包みや何かを、そこへおっぼり出して、そばへ行って『どうしたどうした』と申しました。すると弟はまっ青な顔の、両方の頬からあごへかけて血に染まったのをあげて、わたくしを見ましたが、物を言うことができません。息をいたすたびに、傷口でひゅうひゅうという音がいたすだけでございます。わたくしにはどうも様子がわかりませんので、『どうしたのだい、血を吐いたのかい』と言って、そばへ寄ろうといたすと、弟は右の手を床に突いて、少しからだを起こしました。左の手はしっかりあごの下の所を押えています、その指の間から黒血の固まりがはみ出しています。弟は

目でわたくしのそばへ寄るのを留めるようにして口をききました。ようよう物が言えるようになったのでございます。『すまない。どうぞ堪忍してくれ。どうせなおりそうにもない病気だから、早く死んで少しでも兄きにならぐがさせたいと思ったのだ。笛を切ったら、すぐ死ねるだろうと思っただが息がそこから漏れるだけで死ねない。深く深くと思っただ、力いっばい押し込むと、横へすべってしまった。刃はこぼれはしなかったようだ。これをうまく抜いてくれたらおれは死ねるだろうと思っただ。物を言うのがせつなくっていけない。どうぞ手を借して抜いてくれ』と言うのでございます。弟が左の手をゆるめるとそこからまた息が漏ります。わたくしはなんと言おうにも、声が出ませんので、黙って弟の喉の傷をのぞいて見ますと、なんでも右の手に剃刀を持って、横に笛を切ったが、それでは死に切れなかったのです。そのまま剃刀を、えぐるように深く突っ込んだものと見えます。柄がやっと二寸ばかり傷口から出ています。わたくしはそれだけの事を見て、どうしようという思案もつかずに、弟の顔を見ました。弟はじっとわたくしを見詰めています。わたくしはやっとの事で、『待っていてくれ、お医者を呼んで来るから』と申しました。弟は恨めしそうな目つきをいたしました。また左の手で喉

をしつかり押えて、『医者がなんになる、あゝ苦しい、早く抜いてくれ、頼む』と言うのでございます。わたくしは途方に暮れたような心持ちになって、ただ弟の顔ばかり見ております。こんな時は、不思議なもので、目が物を言います。弟の目は『早くしろ、早くしろ』と言って、さも恨めしうにわたくしを見ています。わたくしの頭の中では、なんだかこう車の輪のような物がぐるぐる回っているようでもございましたが、弟の目は恐ろしい催促をやめません。それにその目の恨めしうなのがだんだん険しくなつて来て、とうとう敵の顔をでもにらむような、憎々しい目になってしまいます。それを見ていて、わたくしはどうとう、これは弟の言つたとおりにしてやらなくてはならないと思ひました。わたくしは『しかたがない、抜いてやるぞ』と申しました。すると弟の目の色からりと変わつて、晴れやかに、さもうれしうになりました。わたくしはなんでもひと思ひにしなくてはと思つてひざを撞くようにしてからだを前へ乗り出しました。弟は突いていた右の手を放して、今まで喉を押えていた手のひじを床に突いて、横になりました。わたくしは剃刀の柄をしつかり握つて、ずっと引きました。この時わたくしの内から締めておいた表口の戸をあけて、近所のばあさんがはいつて来ました。留守

の間、弟に薬を飲ませたり何かしてくれるように、わたくしの頼んでおいたばあさんなのでございます。もうだいぶ内のなかが暗くなつていましたから、わたくしにはばあさんがどれだけの事を見たのかわかりませんでしたが、ばあさんはあつと言つたきり、表口をあけ放しにしておいて駆け出してしまいました。わたくしは剃刀を抜く時、手早く抜こう、まつすぐに抜こうというだけの用心はいたしました。どうも抜いた時の手ごたえは、今まで切れていなかった所を切つたように思われました。刃が外のほうへ向いていましたから、外のほうが切れたのでございましょう。わたくしは剃刀を握つたまま、ばあさんのはいつて来てまた駆け出して行つたのを、ぼんやりして見ておりました。ばあさんが行つてしまつてから、気がついて弟を見ますと、弟はもう息が切れておりました。傷口からはたいそうな血が出ておりました。それから年寄衆がおいでになつて、役場へ連れてゆかれますまで、わたくしは剃刀をそばに置いて、目を半分あいたまま死んでいる弟の顔を見詰めていたのでございます。

少しうつ向きかげんになつて庄兵衛の顔を下から見上げて話していた喜助は、こう言つてしまつて視線をひざの上に落とした。

喜助の話はよく条理が立っている。ほとんど条理が立ち過ぎていると言ってもいいくらいである。これは半年ほどの間、当時の事を幾たびも思い浮かべてみたのと、役場で問われ、町奉行所で調べられるそのたびごとに、注意に注意を加えてさらってみさせられたのそのためである。

庄兵衛はその場の様子を目のあたり見るような思いをして聞いていたが、これがはたして弟殺しというものだろうか、人殺しというものだろうかという疑いが、話を半分聞いた時から起こって来て、聞いてしまっても、その疑いを解くことができなかった。弟は剃刀を抜いてくれたら死なれるだろうから、抜いてくれと言った。それを抜いてやって死なせたのだ、殺したのだとは言われる。しかしそのままにしておいても、どうせ死ななくてはならぬ弟であつたらしい。それが早く死にたいと言つたのは、苦しさに耐えなかったからである。喜助はその苦を見ているに忍びなかった。苦から救つてやろうと思つて命を絶つた。それが罪であろうか。殺したのは罪に相違ない。しかしそれが苦から救うためであつたと思つと、そこに疑いが生じて、どうしても解けぬのである。

庄兵衛の心の中には、いろいろに考えてみた末に、自分よりも上のものの判断に任すほかないという念、オオトリテエに従うほかないという念が生じた。庄兵衛はお奉行様の判断を、そのまま自分の判断にしようと思つたのである。そうは思つても、庄兵衛はまだどこやらにふに落ちぬものが残っているの、なんだかお奉行様に聞いてみたくてならなかつた。

次第にふけてゆくおぼろ夜に、沈黙の人 二人を載せた高瀬舟は、黒い水の面をすべつて行つた。

この文は、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られたデータを利用していただいています。注意書き・ルビ等は電本座の編集上の都合により省略したり、変更しているものもあります。底本・注意書き・データ入力・校正など詳細を必要とされる方は、青空文庫をご覧ください。